

氏名	王 鶴		
学位の種類	博士（歴史民俗資料学）		
学位記番号	博甲第 233 号		
学位授与の日付	2018 年 3 月 31 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
学位論文の題目	清国海軍の近代化水準と日清戦争 —航海日誌と日記の分析、日本海軍との比較から—		
論文審査委員	主査	神奈川大学 准教授	後田多 敦
	副査	神奈川大学 名誉教授	森 武 磨
	副査	神奈川大学 教授	安 田 常 雄
	副査	神奈川大学 准教授	大 川 啓

【論文内容の要旨】

本論文は、日清戦争前と戦中における清国と日本の海軍の兵士養成や訓練、技術力と艦隊管理などの実態を分析し、両国の近代化水準の比較検討を通して清国の近代化の問題を考えることを目的としたものである。具体的には、発掘した「航海日誌」「海軍日記」などから、両国海軍兵士の日課、勤務、訓練、素養、軍事紀律、技術力、後方勤務を分析し、両国海軍の比較を行うという方法をとっている。あわせて、清国海軍に関する日本と中国の幾つかの論争に対し、再検討を行った。論文の構成は以下である。

序 章

第 1 節 研究の目的及び背景

第 2 節 史料と先行研究

第 1 章 日清戦争前夜の清、日海軍の航海日誌について紹介と背景分析

第 1 節 日清戦争前夜の清、日海軍の航海日誌について紹介と背景分析

第 2 節 清、日海軍航海日誌の様式、記録内容の紹介及び比較

第 3 節 日清の海軍艦船軍拡—航海日誌史料関連背景を分析

第 2 章 日清戦争前夜の艦隊管理について記録、分析

第 1 節 日清戦争前夜の北洋海軍の士官、兵士養成制度と問題点

第 2 節 1890 年代における清、日の海軍訓練の考察、偏重点の比較

第 3 節 水兵の勤務と生活について

第 3 章 外訪活動及び清、日海軍交流について

第 1 節 輸入艦艇回航に関する訪問活動の比較、分析

第 2 節 清、日海軍の間の交流活動について

第 4 章 日清戦争時の清国、日本海軍の技術力の分析と黄海海戦の再検討

第 1 節 日清戦争時の清国海軍の後方勤務についての問題

第 2 節 大孤山海戦のデータ分析と清、日海軍兵士の軍事的素養についての再検討

終 章 結論と展望

第 1 節 結論

第2節 今後の課題展望

本論文の内容は以下のように要約できる。

序章では、研究目的を提示し日本と中国の日清戦争研究史を整理した。その上で、「航海日誌」「海軍日記」を紹介、先行研究を論じ資料的価値と本研究の位置づけと意義を示した。本論文でいう「航海日誌」は海軍における軍艦の公式記録で、清国では「駕駆日記」と呼ばれた。「海軍日記」は将校、幕僚などの個人的記録だが、航海中の見聞などを詳しく記載しているものがあり、公的記録を補完する資料である。

第1章では、日清戦争前の清国、日本海軍の航海日誌制度確立過程を分析した。清国では、海軍揺籃期の1860年代に航海日誌の前身「輪船日記」が確認できる。福建船政水師が最初に西洋から日誌制度を学び導入した。当初から「駕駆日記」「管輪日記」の二種類の「日誌」が存在していたが、それが1888年の「海軍章程」で正式な「航海日誌」となる。一方で、日本の制度は1871（明治4）年に始まり、「機関日誌」「軍艦日誌」が存在していたが1891（明治24）年の改正で様式が統一された。日誌制度の整備は艦隊管理の「一体化」の一環だったと位置付ける。

制度沿革を概観した上で、『田所広海海勤務日誌』『北洋海軍鎮辺兵船管輪日記』の様式、記録内容を比較している。両国とも西洋様式を採用したが、国情による修正や差異がある。例えば、記入する際、清国では毛筆、日本は万年筆を使用した。清国では伝統的な蘇州号碼（そしゅうごうま）を使い、日本は多くのデータでアラビア数字を使った。北洋海軍の日誌には「別紙」と呼ばれる記載がなく、事件記録が欠けるなどの差異を指摘した。

第2章では両国海軍の徴兵、養成、訓練、生活管理の在り方などを比較検討した。清国近代海軍は、イギリスの水兵養成、訓練制度を参考に「練勇」という制度を採用したが軍と営を基本編制とし中国の古いスタイルを残していた。また、練勇には山東省沿岸地域の漁民が多かったことに特徴を見出し、海軍兵士は待遇がよいため士官学校を媒介として同郷者が集まったとした。採用に際し、規定に反して年齢や身体など、兵員の要件を満たさないものが採用されたりしたとする。人材の確保や養成などに残る古いスタイルを指摘した。

「航海日誌」の比較から、清国艦隊の軍事訓練水準は、同期の日本海軍との間に大差がないことを確認している。ただし、兵士の健康管理と生活の合理化の面は、清国は日本に及ばず、士官の平均的教育水準の格差は大きかった。その原因は、清国の社会近代化水準が日本に及ばなかったためだと考えた。

第3章では、両国の外訪活動と海軍情報収集と交流を分析した。清国はイギリスなどから軍艦を購入し、その機会を情報収集や兵士の能力を高めるためにも利用した。例えば、丁汝昌は「超勇」型巡洋艦回航の際、イギリス、フランス、ドイツ、イタリアの海軍工廠を視察。イギリスやドイツでは軍艦の建造作業なども視察、イギリスでは作業を監督し、火砲射撃の試験などに参加している。また、回航を清国海軍自身で行い、遠洋航海の訓練や経験を積ませ航海能力を高める機会とした。

清国の北洋艦隊が1891年に日本を訪問した出来事を分析。従来の日本側研究では清国が海軍の実力を誇り脅威を与える機会だったと理解してきたほか、観察記録などから清国軍艦の管理水準の低さを指摘していた。しかし、清国側は自国が圧倒的に優位だとは考えておらず、日本訪問は航海訓練の一環であったとした。清国艦艇の不潔さや紀律弛緩の指摘に対しては、清国海軍の近代化の不徹底さを確認した一方で、艦艇の不潔さという点は否定した。

当時は造船技術の秘密性が低かった上に、1890年代の日本の艦艇性能は清国を超えていたため、日本側は比較的開放的だった。日本は清国海軍の訪日を情報収集の機会として、親善活動や宴会などで艦艇の状況や武備、兵士らの挙措を観察し、清国海軍の実力を把握した。一方、清国ではこの

ような軍事情報の収集はシステム化されていなかったとした。

第4章は本論文の中心である。清日開戦直前、戦時の北洋艦隊と連合艦隊の後方支援と軍備状態を検討した。例えば、清国では資金不足から、価格が安く品質の悪い石炭が使用されたこと、政争や資金不足により、砲弾の供給不足と質の低下などの事例を示した。軍事費不足によって軍艦の過重な使用があり、更新が停滞していたことを軍艦の服役年齢などで検証した。また大孤山海戦を事例に取り上げ、清日艦隊の砲弾消費数、被弾数などを資料から推計し、火力の差を具体的に示した。

これらの分析と第2章、第3章の考察も総合して、清国北洋艦隊の失敗の主要原因は技能の差や将兵の能力不足ではないと結論づけた。この時期、北洋艦隊は艦隊の増強、後方支援、整備の経費調達が困難になるという事態に直面した。海軍に対する朝廷の支持が低く、必要な経費が不足し、艦隊の備弾は不足し装備の更新も停滞した。結果的に両国の軍備格差は拡大した。北洋艦隊は兵士の召集、訓練、軍組管理上にも問題点があり、常備兵の数が足りず、海兵の違紀もあったが、それは失敗の副次原因にすぎないとする。

終章では全体のまとめを行っている。

「航海日誌」「海軍日記」、日本海軍の情報、海戦のデータから、日清戦争前、戦時における清国海軍の技術、管理、人員養成などの具体的な水準を把握した。この分野は直接的に海軍内部の近代化水準を反映しているからである。これらの分析を踏まえ、北洋海軍の訓練水準が低く、水兵の軍事素養が悪かったなどとする先行研究の見解を誤りだと結論づけた。

従来の研究では、北洋海軍の装備水準は日本海軍より勝っていたが、将兵、特に兵士の軍事素養、業務水準が低く、それが清国の敗北原因となったと指摘してきた。しかし、日清戦争前の北洋海軍は基本的に海軍勤務専門になっており、水兵訓練・武器操作などの技術力・戦術力をきちんと身に付けていた。この点においては、日本水兵と比べて、大差はなかった。しかし、清国は海軍軍令・軍政が混乱しており、軍事産業と軍隊近代化への長期計画がなかった。財政と軍事予算が制度化されず、教育制度も整っていない状態であった。

社会組織と形態上では、清国はまだ準近代国家のレベルにあった。そのため、時代遅れの社会環境が、既に近代化されている海軍（北洋艦隊）の活動と発展を制約して失敗を招いた。海軍以外の諸問題が北洋艦隊の敗北の主因になったのである。清国には日本に存在した海軍を支える全面的な近代化改革がなかったと結論づける。

【論文審査の結果の要旨】

本論文の評価すべき第一は、「航海日誌」という海軍の公式記録や、将校、幕僚などの個人的記録「海軍日記」の資料的価値を見出し、軍隊の実態を裏付ける資料として活用したことなど、新たな資料の発掘とその利用方法を提示したことである。第二は、近年の日清戦争の研究動向を踏まえ、兵士の軍事的素養や艦隊管理など、海軍の人的な問題や制度運営などの在り方から、日清戦争前夜から戦争期の具体的な「近代化水準」を明らかにした点である。

本論文の学問的貢献として次の点を挙げたい。

第一として、中国側と日本側、双方の日清戦争研究史を整理概観していることである。研究史の整理は論文にとって不可欠のもので当然の前提だが、双方の研究史を整理しながら視点や論点の差異なども示され、現在の中国における日清戦争研究の動向を伝えることにもなった。この点は研究の基礎的な底上げに貢献するものだと考える。

第二は、評価点でもあげた「航海日誌」「海軍日記」などの発掘と活用である。「航海日誌」は制度として義務付けられた公式記録であり、艦艇や兵士の動向を把握する上で基礎的な情報を提供する。公式記録とそれを補完する「海軍日記」の資料的価値を見出し、活用の具体例を示したことは、海軍や戦争研究における新たな方法、資料群を提供したことになる。今後新たな「航海日誌」が見いだされる可能性もあり、研究の質を高めることに結びつくと考えられる。きわめて重要な貢献だといっている。

第三は、兵士の養成や軍事素養、艦隊管理や軍事技術などといった側面に着目し、それらを「近代化水準」という方法で検討した視点である。これは未開拓の分野だったわけではないが、兵士などに着目する近年の研究動向に結びつくものであり、日清戦争研究に一つの側面を付与したといっている。

第四として、具体的な事実の掘り起こしや実証での貢献をあげることができる。多数あるが幾つか例示すれば以下である。まず、日清両海軍は1880年代ともに高度成長期だったが、清国は1890年以降に停滞して日清戦争を迎えたとする。また、海軍兵士の養成に関連して、練勇には山東省沿岸地域の漁民が多かったことを確認しているが、その背景には海軍兵士の待遇が良く士官学校を媒介として同郷者が集まっていたことなどを見出した。また、日誌に記入する際、清国では毛筆と蘇州で生まれたとされる蘇州号碼、日本は万年筆とアラビア数字を使用した。さらに、日清戦争開戦時の使用石炭の種類や砲弾の命中率など、より具体的な事実を抽出している。これらの事実を見出したことも、具体的な実証においては意義ある成果である。

第五として、従来の研究への批判と自説の実証もあげたい。従来の研究では、清国海軍の軍事訓練や兵士の軍事素養のレベルが日本と比べると低かったとされてきたが、本論文では両者の水兵訓練、武器操作などの技術力や戦術力で大差はなかったことを資料にもとづいて明らかにした。問題は軍令や軍政の混乱であり、軍事予算の整備など、軍隊を支える国家や社会システムだったとする。

本論文の評価点や学問的な貢献点を挙げてきたが、課題がないわけではない。一つは論文の叙述の整理不足などによる難解さや曖昧さが散見されることである。また、本論文で実証している海軍の具体的な側面での近代化だけでなく、社会一般の教育や制度にまで結論の射程を広げている点などは、踏み込み過ぎていると指摘することもできるかもしれない。ただ、叙述の問題は丁寧に読めば理解できるものであり、結論の拡大も今後の「近代化論」への課題や指針と位置付けることもできるだろう。これら幾つかの課題は、論文全体の成果と評価を損なうものではない。

本論文には、日清戦争直前と戦争期の海軍の「近代化水準」という問題を兵士の素養や艦隊管理、

技術などから考えるというテーマ設定やアプローチでの新しさがある。いわば「兵士の日常」からとらえるという点で、歴史民俗資料学の方法を活用したと評価したい。また、「航海日誌」という新しい資料を見出し、資料的価値に着目し活用した点は資料学の方法を具体的具に展開したといえることができる。清国と日本の勝敗を分けたのは、軍隊を支える国家や社会システムの差（近代化水準の差）だったとする結論も、実証過程も含めて日清戦争研究に新しい知見を加えるものである。本論文の方法による研究は進展が予測され、研究のさらなる深化・発展への期待が持てるものである。

審査委員は口頭試験を通して、本論文の課題や論点に対し質問したが、いずれに対しても回答がなされた。以上を踏まえれば、王鶴氏に博士（歴史民俗資料学）の学位を授与することが適当であると、審査委員一同で判断した。